



傷跡 (瘢痕) について



形成外科部長

松下 友樹

「2週間以内に治った傷はきれいに治ることが多い」というのが昔の知見です。言い換えると、「比較的浅い傷は早く治るため、きれいに治りやすい」ということです。最近では研究が進み、「皮膚深層に位置する真皮の網状層の損傷が少なければ、きれいに治りやすい」ということが分かってきています。

傷跡のことを瘢痕といい、硬く、隆起し、色調の強い瘢痕のことをケロイド・肥厚性瘢痕といいます。これらの本態は、傷の修復過程でのさまざまな要因による局所の炎症および過剰なコラーゲン産生であると考えられています。その要因として、傷の深さ以外に、外力、ホルモン、高血圧、感染など、さまざまなものが挙げられます。「その傷が将来きれいになるか」という問いにお答えするには、これらの複合的な要因を念頭においた上での予測が必要になります。ケロイド・肥厚性瘢痕だと分かった場合、もしくはそのリスクが

高いと分かっている場合は、なるべく早期から対応する必要があります。形成外科では、縫合の工夫、放射線治療、内服治療、ステロイド剤の注射やテープ、外的な圧迫など、さまざまな治療法を組み合わせて、科学的・論理的に傷跡の改善を目指しています。これまでの常識では「治療は難しい」、「体質だから諦めなさい」とされてきた傷跡の悩みについて、形成外科では改善できる可能性があります。もしお悩みの患者様がいらつしやいましたら、お気軽にご相談ください。



vol.86

ちょっと離れた処から見る(俯瞰する)

ふれあい交流センター センター長 袴田 恭紹



人権 コラム

交流センターの扉が開くと、多くの明るい表情の方々が入ってきます。実年齢は分からないものの軽やかな動きに躍動感が溢れています。マスクをしていない方が増えてきているので、なお更に感じられるのかもしれない。

さて、WHO(世界保健機関)が、新型コロナウイルスによる「緊急事態」の終了を宣言しました。日本においても感染症法上の位置付けが2類相当から5類感染症に移行しました。コロナ禍が終わったとは言えませんが、新しいステージに移行しているのは、間違いありません。元に戻ろうとする動きもあります。この3年間で学んだことを生かした形で新ステージに移行していきたいと考えています。特に、人権については、考えさせられることが多い、今回は偏見の自覚について記述したいと思います。

コロナ禍においては、お互いの行動を制限し合う重苦しさが際立ちました。人間の心理が行動になって表れることに、恐ろしささえ感じることがありました。〇〇警察という言葉が盛んに使われ、正義という刀を振りかざしている人も現れました。

ひとつの事例で考えてみましょう。テレビで、中学生のインタビューが流

れていました。その子は過敏症でマスクを着用することができず、周りから差別的な目で見られることがあると話していました。新型コロナウイルス感染症拡大を集団で防止しようとする正義感の表れであることは理解できますが、相手のことを分らないままに、全ての人に同じ行動を強いるのは、本当に正義なのでしょうか。正義感だけではなく、自分の思い込みや固定された考え方によって、特定の人を傷付けてしまうことは、思いの外、多くあるのかもしれない。大切なのは、個(相手)の立場になって考え、思いやることではないでしょうか。

自分自身が気付いていない見方や捉え方の歪みや偏りを「無意識の偏見」と言います。気が付かない内に自分の中に入り込んでいます。偏見があることが、非なるのではなく、偏見がないと思っていることこそが非なるのではないのでしょうか。

相手を思いやることができれば、今考えていることが偏見なのかもしれないと気付く、相手が心を痛める言動を控えることができるかもしれません。自分自身の考え方を、ちょっと離れた処から見る(俯瞰する)ようにしてみたいと思います。